
lifE/worTh/craVing

霖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Life/Worth/craving

【Nコード】

N3825BA

【作者名】

霖

【あらすじ】

拾った命は使い切らないと勿体無い。どうせなら、楽しんで生きてやろう。自分のセカイがあやふやだったとしても。

嗚呼、生きてるって素晴らしい。文章で纏めることに慣れていない為、稚拙な文章になるかと思いますが、読んで頂けたら幸いです。

Life/border/confusion(前書き)

開いてくれてありがとうございます！
楽しんで頂けたら嬉しいです！

l i f E / b o r d e r / c o n F u s i o n

この街には、猟奇殺人犯がいる。
何でも、もう玩具を4人壊したとかなんとか。
物騒な街だななんて思いながら、ミキヤを待つ。

確かに見ていた21世紀は、気が付けば20世紀に。
理由は分からないけど、俺は確かに生きている。
折角の2度目だ、楽しまないと損でしょう。

さかい げつな
坂井月菜、16歳。
オレ
私は、今、生きている。

2度目の高校生活なんて普通では体験出来ないだろうから、どうせならはしゃぎたかった。

それで、遊びに費やす時間を少しでも増やしたかったから、家から一番近い私立校に入学することにした。

就職率も中々だしここに決めてしまえー、なんていう適当な理由だけど、特に高校に求めるものもなかった私には十分過ぎる理由だった。

両親からの反対も様々な理由をでっち上げて押し切り、晴れて入学、キラキラの一年間が始まったのである。

莫迦みたいな理由で決めた高校だけど、全く後悔はしていない。

だって、こんなに楽しい玩具を見つけたから。

二度目の高校生活と呼んだものは、一度目と違い過ぎた。

着物で学校に来た奴なんて居なかったし、こんなに学校に行くのが待ち遠しいとは思ってもみなかった。

学校内でナンパされるのも初めて。

いや、体験してたらそれはそれで不味いんだけど。

一度体験した筈のことすら新鮮に見えるのは、ミキヤが居たからかもしれない。

何故かは分からないけど、一目見た瞬間から私はミキヤを気に入った。

この感覚を上手く表せないけど、多分、恋に似ている。

黒桐幹也。

彼は未だ少年の面影が残る、柔らかな顔立ちをしていた。

真っ黒な瞳は温厚な人柄を匂わせて、弄っていない髪がその雰囲気強くする。

ちよつと弄れば十人中何人かは振り向いたりするくらいには美系なんじゃないか。

まあ、黒と黒の飾り気のない服装だからミキヤだって気もするけ

ど。

黒ぶち眼鏡っていうところも何気にポイントだと思う。

一年生生活もあと3カ月程だというのが少し哀しい。

来年もミキヤが学校に居るかなんて私にも分からないから、正月には神様とやらにお願いしてみようか。

私から玩具を取り上げないで下さいって。

寂しげな雨音を聞きながら、ミキヤを待つ。

あの子も一緒に居るのだろうなと思いつつながら窓を眺めていると、待ち人に声を掛けられた。

「お待たせ。行こうか」

「オツケー。生徒会室だったよね」

ミキヤから先輩が学校を辞めるから、お別れ会みたいなものをやると聞いて、その先輩が私のお気に入りだったから参加しても良いかと聞いてみた。

それで、良いつて言ってくれたから私のクラスまで迎えに来てとお願いしたのだ。

大切なお気に入りが入りが居なくなるのは寂しいと、心の底から思う。

白純里緒。

初めて見たときは女みたいだなあとしか思わなかったけど、いつからか急に好みになった。

笑顔もかなりお気に入りだ。

ふと、ミキヤの隣を見る。

結構な割合で隣に居る女の子が居ない。

ミキヤが頑張って話しかけてる子も今日の話に誘ったと聞いたん

だけど、はて。

「ミキヤ。両儀さんが居ないけど、誘ったんじゃなかったっけ？あれ、もしかして私の気のせい？」

「確かに誘ったんだけど。昨日の別れ際に言ったのにな。月菜さんも式を見てないの？」

私から聞いたって言うのに、知ってる筈ないじゃないか。

……両儀式もお気に入りなのに、なんて勿体無い。」

お気が入りが三人集まるなんていう、私にとって天国のようなイベントは、無くなったようだ。

「いいや、見てない。違うクラスって不便だよー。ていうか、両儀さんのこと式って呼ぶけど、何故に呼び捨て？私がミキヤと会ったときには既にそうだったけど。……ナニナニ、ひよっとしてデキちゃってるワケ？私、お邪魔虫だったかな？」

「あのね。僕と式はただの友達だよ。それ以上の関係じゃない」

「そう？ただのクラスメイト同士で下の名前で呼び捨てなんて、噂されてもおかしくないけど」

両儀式。

私服オツケーなこの高校でも流石にそれは無いんじゃないかと思う服で来る、可愛い子だ。

だって、着物の美人なんて、目立ち過ぎるでしょ普通。

莫迦みたいに似合っている着流しの立ち姿は、教室を何処かの屋敷かと勘違いしてもおかしくはないぐらい綺麗で。

絹みたいに綺麗な黒髪を適度にババツと切ってほつたらかshにして、それが耳を隠すぐらいのショートカットになっていて、これまた良く似合ってる。

出来過ぎた容姿の所為で性別を間違える人も結構居たらしい。

私は間違わなかったけど。
だって、どっちにも見えなかったから。
そして、私の好きな目をしていて、笑顔も最高。
私の大好きな女の子だ。

「あのね、式はそっちのほうが好きなんだ。前に両儀さんって呼んだら、思いつきり睨まれたよ。視線で人を殺すっていうけど、式はその素質ありまくりだ。」

私が両儀さんって呼んだときも睨んでくる。

「なんでだか知らないけど、彼女は名字で呼ばれるの好きじゃないんだって。名字で呼ぶのなら“おまえ”でいい、なんて言うんだよ。それは僕のほうがイヤだから、妥協案として“式さん”になったんだけど、それもイヤだっていうから式って呼んでるんだ」

「あー、それ私も言われたよ。名字で呼ぶなって」

「え、そうなの？」

「うんうん。名字で呼ぶな、呼ぶなら“おまえ”のほうがいいって言うからね。だから、“両儀さん”って呼ぶことにしてる」

声の代わりに、ミキヤが何とも言えない顔を返してきた。

まあ、ちよつとした嫌がらせだ。

嫌がらせといっても、別に私は両儀式のことは嫌いじゃない。

むしろ、好きな女の子のタイプのど真ん中を射抜いていると言ってもいい。

私は、両儀式に嫉妬している。

初めはミキヤの隣のスペースを持っていることに嫉妬しているのかと思っただけど、少し違った。

私は、彼女の在り方に嫉妬している。

隠し通せそうにないからと、二重人格であることを私にバラしてきた。

ミキヤにはまだ言っていないらしいけど、私が気付きかけていることに気付いたんだらう。

私と両儀式は似ている。

似ているけど、全く別物だ。

二重人格で上手くやっていってる両儀式と、オレとワタシとが混同して時々自分を見失う私。

私が彼女に嫉妬するのは当然かもしれない。

「そろそろ行かないと、お別れ会始まるんじゃない？ほら、行こうよ」

「うん。行こうか」

里緒先輩のお別れ会は、死人が出ることもなく無事終了した。

青いジーンズに白いシャツを着たお気に入りには、いつもの笑顔をを見せてくれた。

それだけで、行った甲斐はあったと思う。

里緒先輩の笑みが頭に焼きついて離れない。
なんて素晴らしい作り物を。
なんて満足げな微笑みを。
私に魅せてくれるんだ。

混ざり合うセカイの中での、変わらない思考。
混在する思考の中での、変わらない歓喜。

ああ、人間って素晴らしい。

l i f e / b o r d e r / c o n f u s i o n (後 書 き)

主人公の名前は空の「境」「界と、TYPE」「MOON」から取っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3825ba/>

lifE/worTh/craVing

2012年1月9日22時45分発行